

瀬良英介の

飼料畜産トピックス（272）

2012年1月

（272）有機酪農の可能性を探る米国北東部の大学

米国北東部の大学と米国農務省では有機酪農（オーガニック・デーリィ）を営んでいる酪農家がより良く牛乳を生産し市場出荷が出来るようにと12人の研究者が関わっています。大学としてはニューハンプシャー大学、メイン大学、ヴァーモント大学、コーネル大学です。経営や利益を改善する方法としては、（1）放牧期間を延長し、（2）アマニ種子を与えることにより牛乳の付加価値を高めることです。

過去10年間で米国の有機酪農が米国の有機農業の中で一番速く成長している部門です。また、米国の有機酪農の25%は米国北東部が占めていることをニューハンプシャー大学で有機酪農を専門にするブリト助教授が指摘しています。

この北東部での有機酪農は今後とも伸びることが予想される中で有機酪農家の関心事でもある前述の二点について研究資金が投入されています。一つは放牧についての連邦政府の新しい規則です。それは乳牛を含む反芻獣には年に120日間の放牧をさせなければいけない。また、全摂取量の約三分の一は放牧によるものでなければいけない。研究者は放牧を長期間行うのにベストな草種などのプロット試験を開始します。例えば、ペレニアル・ライグラス、ホワイト・クローバー、ソルガム・スーダングラス、ブラシカ類や穀類などで、放牧期間を延長し粗飼料からの採食量を増やすことです。

二つ目の研究課題は出荷する牛乳の質を上げることです。北東部の有機酪農家は乳牛が放牧されている時にはオメガ3やCLAが多い牛乳を出荷できますが、放牧をしていない時でもオメガ3やCLAが高い牛乳を出荷する為には飼料の配合も考えなくてはなりません。これが出来れば放牧をさせながら利益率も上げることが出来ると考えられます。一つの案としてはアマニ種子を与えて牛乳中のCLAを上げることです。消費者が健康面から関心を持っているオメガ3やCLAを保証できるようなレベルを含む牛乳の年間出荷の研究が必要になったことです。

この研究プロジェクトは4年間で予定していますが、広くは農業エコシステムの考え方が入っていますから、研究のコアチームにはそれぞれの大学の動物学者のみならず経済学者、耕種学者、環境学者、エクステンションに加え北東部の有機酪農家20人が協力します。米国農務省からの補助金は290万ドル（約2億2000万円）です。

飼料給与試験に関しては米国のランド・グラント・大学として初めて設立されたニューハンプシャー大学の有機酪農研究農場です。ここでは50頭のジャージー牛が飼われており、プロット試験はニューハンプシャー州リー市にある300エーカーの農場を使います。

ブリト助教授はこの4年かけてやる大がかりな研究結果は北東部の有機酪農家のためのみならず、地域内の従来酪農家、また、北東部以外の全ての酪農家にも役立つであろう、としています。

この一部は米国のホーズデーリィマン誌の2011年11月14日号に掲載されていますし、今後の進行状況や内容などもニューハンプシャー大学などのサイトでも読むことができます。

日本でも北海道などでの放牧形態の更なる取りこみや年間を通してオメガ3やCLAを含む付加価値を高めた牛乳の生産に関しては興味のあることでしょう。試験予定ではアマニ種子が取り上げられていますが、大豆などを与えることでもCLAなどが上昇する米国の研究などに関しては筆者が以前に酪農学園大学の酪農ジャーナル誌に3回に分けて掲載したことがあります(瀬良、2012)。